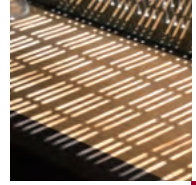




京町家のいろは

たてもものくらしの基本帖



京町家の魅力を 未来に伝える

京町家は、千年を超える歴史の中で磨かれてきた京都の美しい景観や、奥深い生活文化の象徴であり、京都だけでなく日本の、そして世界の宝です。そこでは、日本人が大切にしてきたくらしの美学、生き方の哲学、洗練された美意識などが脈々と受け継がれてきました。

京都市では、平成12年に「京町家再生プラン」を策定し、多くの方々と連携しながらさまざまな取組を展開してきました。こうした効果もあり、近年では住まいのほか、商業施設や文化・芸術施設等としての活用も進んでいます。

しかし、その一方で、今なお毎年約800軒の京町家が滅失し、京町家の空き家も増加し続けている状況です。このままでは京都が京都でなくなってしまう。そんな大きな危機感の下、平成29年11月に「京都市京町家の保全及び継承に関する条例」を制定し、取組を進めてまいりました。

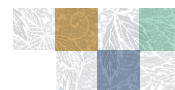
さらに、平成31年2月には「京都市京町家保全・継承推進計画」を策定し、これまでにない支援・取組を行うこととしております。

本計画において、京町家の生活文化等に関する教育研修プログラムの作成や学習の機会の創出を行うことで、未来を担うこどもや、不動産業者、建築関連業者（設計・施工等）、活用事業者に対し、京町家で培われた生活文化を伝え、京町家の価値の共有を図ることを保全・継承のための戦略として定めたところです。



この「京町家のいろは」は、本取組の一環として、京町家の魅力をこどもたちに伝えるための手引きとなるよう作成した素材集です。

こどもたちと一緒に実際の京町家を見学する時の教材作成の参考資料として、また、一般の事業者、市民の方の京町家入門のための基本資料としても活用していただくことを願っております。



もくじ

第1章

《たてもの編》————— 3

- 1 京町家のはじまりと現在 …………… 4
- 2 京町家のデザイン …………… 6
- 3 “うなぎの寝床”の中へ …………… 9
- 4 自然とともにくらす …………… 11
- 5 京町家をささえる職人技 …………… 13

第2章

《くらし編》————— 15

- 1 京町家の365日 …………… 16
- 2 くらしの知恵 …………… 20
- 3 毎日に安心と安全を …………… 21
- 4 地域のつながりを大切に …………… 22
- 5 京町家を生かしたくらし …………… 23

資料編

- ・ 表屋造
- ・ 一列三室型
- ・ 織屋建
- ・ 路地の京町家

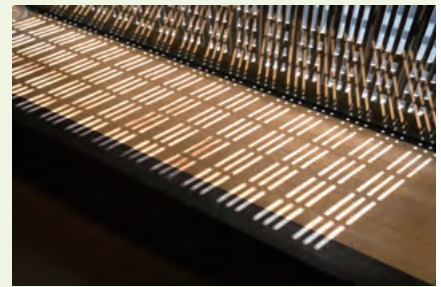


〒760
雀学区のちゅん組小学校。まさこ先生は、「まぢゃ先生」という愛称で親しまれている京雀。時にきびしく、時にやさしく京町家について教えてくれる。小雀の蔵之介こと「くらちゅん」は、クラスのムードメーカーでおうせいな6年生雀。





京町家 の いろは



第1章 《たてもの編》



京町家の はじまりと現在

第1章
《たてもの編》

1

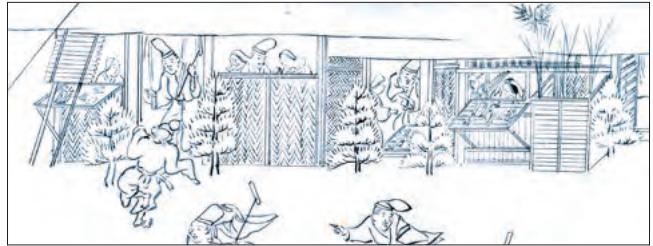
京町家は、平安時代の中期にその起源を持ち、江戸時代の中期に今日の京町家の原型が形成され、その後、洗練された様式が確立していきました。さらに大正末期から昭和初期にかけては洋風建築などの影響を受けながら変化していきました。



平安時代

京町家のルーツは道に面した小屋だった

地方から出てきて、ものづくりや商いを営んでいた人々が、平安京の都市住民として住み始めました。やがて自らのくらしの拠点を大路、小路に面した空間に求め、小屋を造っていったことが京町家の始まりであるといわれています。



年中行事絵巻模本（毬杖／部分）京都市立芸術大学芸術資料館蔵
平安時代末期の宮廷、公家における年間の儀式、祭事などの行事や民間の風俗を描いた絵巻。大路に面した小屋の様子が描かれています。

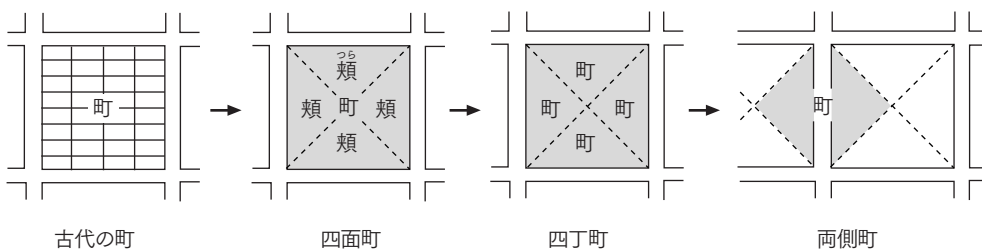
室町時代

軒を連ねて建つ京町家

まちの発展とともに力を付けた都市住民は、通りに面した屋敷地の築地塀を壊して、建物を建築するようになります。こうして通りに開いて商売を行う京町家の原型は、しだいに軒を連ねて建ち並ぶようになりました。応仁・文明の乱（1467～1477年）後の復興の中で、町は道路を挟む両側の家々で構成される両側町というコミュニティを形成していきました。



上杉本洛中洛外図屏風（部分）米沢市上杉博物館蔵
安土桃山時代、狩野永徳が当時の京の洛中（市街）と洛外（郊外）の風俗を描いたとされる屏風絵。軒を連ねる京町家の様子を見ることができます。



両側町の成立の過程
街区単位の「町」が次第に分化、独立し、やがて通りを挟んだ両側町へと変わっていきました。

第1章 《たてもの編》
・京町家のはじまりと現在

江戸時代

現在の京町家の原型の形成

江戸時代に入って、大工の技術や工具の発達により、華奢で洗練された千本格子や、大広間を作ることができるようになりました。さらに江戸時代を通じて京町家の洗練された様式が確立していきました。

近江屋吉左衛門家文書 三条油小路絵図 (西側/部分)
京都府立京都学・歴史館蔵

文政3年(1820)に三条通から六角通までの油小路通の町並みと行き交う人々の姿を描いた絵巻



明治・大正・昭和

2階の階高や外観デザインの変化

明治時代の後期になると、2階部分が1階部分と同じ高さの本二階が一般化し、窓も格子窓や木枠のガラス窓に変化しました。さらに西洋文化の影響が京町家にもおよび、大正末期からは、1階の出格子の腰に石やタイルが貼られ、上部には金属製の格子が設けられるようになりました。また、洋風の外観を持つ、いわゆる「看板建築」への改修も行われました。



上：昭和初期の七条大宮
京都市歴史資料館蔵

左：松原通を西行する月鉾
(明治初期頃か)

平成～現代

京町家の滅失と保全・継承への動きの高まり

昭和末期から平成にかけて社会経済構造の変化と、バブル景気の影響で、都心部において京都の町並みの原風景である京町家の滅失が急激に進行しました。これに対して、京町家の保全・継承への動きが始まり、さまざまな活用も行われるようになり、現在では規制・誘導のための制度・事業が充実しつつあります。



解体される京町家



京都の歴史文化を情報発信する拠点として活用されている京町家



新たな活用がされている京町家でのお茶会の様子



京町家の デザイン

第1章
《たてもの編》

2

美しい町並みが作りだされ、保たれるためには、そこに住まう人々の町に対する愛着や誇り、また建物や暮らしについての共通のルールが必要です。特に、個々の建物と町との関係、連担(つながり)のしくみが京町家のデザインを特徴づけています。



町並みとしての美しさ

京町家は一敷地の中に建つ単独の建物でありながら、町の中で軒を連ねる建物の内の一軒として、連担して町をつくる要素となっています。建物の外観は、一軒一軒、細かな違いがありますが、連担のルールを育て、守ることにより、全体の調和を乱すようなデザインを避けて、質素で洗練されたという意味の「こうと」なデザインが継承されてきました。

ルールは
ほんまに
大切やね



ほんま
ほんま



棟や庇の高さや格子の意匠、看板、通り庇の屋根材などの微妙な違いが変化を生みだしています。

京町家の意匠

千本格子、瓦屋根、通り庇、虫籠窓により構成される洗練された外観は、統一された寸法体系と素材により規格化された合理性も持っていました。

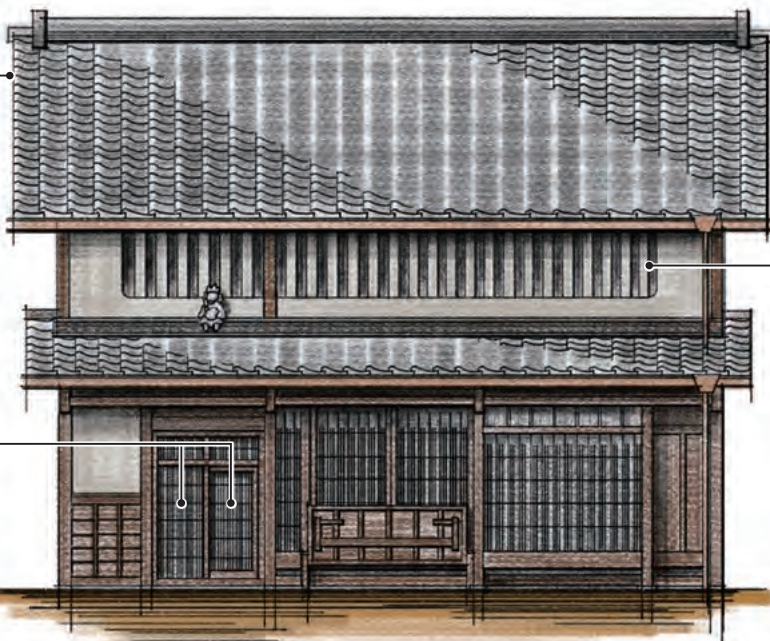


ケラバ

屋根の妻側の端部のことを「けらば」と呼びます。京町家は隣の家と接しているので、けらばを重ね合わせ、双方の建物に雨が侵入しないようにお互いが工夫をしています。

大戸と潜り戸

大きな荷物を出し入れする時には「大戸」を、また日常の出入りのためには大戸に設けられた「潜り戸」を利用しました。



虫籠窓

明治期までの京町家は、階高を低くし、2階の窓の縦格子を土で塗りこめることにより、通りの向かいからの延焼防止を図っていました。その外観から虫籠（むしこ）と呼ばれました。



鍾馗さん

通り庇の上の小さな鍾馗像。鍾馗さんは中国の唐の時代に疫鬼を退散させたという故事にちなんだ魔除けの神さまです。



揚見世(バツタリ床几)

家の正面にある折りたたみ型の縁台です。昼間は、商品を並べたり客が腰をかけたりにするのに用いられ、夜間は格子面を守る防犯装置の役割を果たしていました。



駒寄せ

軒下に設けられる柵で、道と敷地との間の境界の役割を果たしています。古くは牛馬をつないだという説もあります。



軒瓦

通り庇の軒先の瓦にもいくつかの種類があります。写真は瓦の下のラインが真っ直ぐに揃った一文字瓦と呼ばれる軒瓦です。軒瓦も、統一感のある町並みを作っています。



格子

格子の形は糸屋格子、染屋格子などと呼ばれるように元々は職業によって異なっていました。光や風を通しながら視線を遮ります。



通り庇

間口いっぱいに設けられた庇は、軒下で通りと一体的な利用がなされ、連なることで統一感のある町並みを生みだします。

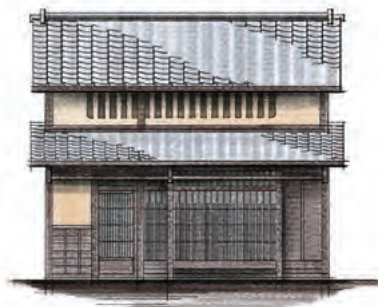
京町家の種類

京町家を外観上の特徴から類型化したものです。2階部分の階高の高低、高塀の有無、1階の開口部の形態などにより分類されます。外観の共通の要素には、瓦屋根、大戸・格子戸、出格子、虫籠窓、土壁などがあります。看板建築は、側面から屋根の形状を見ることが見分けることができます。この他に3階建もあります。



そうにかい ほんにかい
総二階(本二階)

2階の天井高が1階と同程度の高さです。明治末期から大正時代にかけて完成した様式です。



につしにかい
つし二階

2階の天井が通常より低く、虫籠窓が多く見られます。近世中期に完成し明治時代の後期まで一般的に建てられた様式です。



ひらやだて
平屋建

京町家の特徴を持つ一階建(平屋建)の建物です。



しもたや
仕舞屋

元々専用住宅として建てられた、表に店舗を持たない京町家です。表の窓の開口部(出格子)が小さくなっています。



だいばいづくり
大塀造

仕舞屋の中でも特に裕福な商人の専用住宅として建てられた塀付の京町家です。通り側に高塀があります。

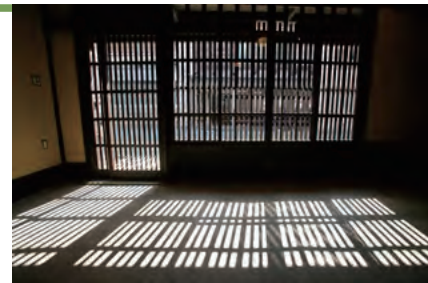


かんばんけんちく
看板建築

近代的なビルに見えるように京町家の表側を全面的に改修した様式です。元の外観に戻すことは比較的容易です。



“うなぎの寝床”の中へ



第1章

《たてもの編》

3

京町家は、狭い間口からは想像できない深い奥行きがあります。その中に、連担(つながり)のルールを守りながら、公と私、ハレとケを使い分け、自然とも触れ合うことができる知恵や工夫が詰まっています。

京町家の間取り

京町家の基本的な間取りは、両隣の建物や庭との連担のルールをベースに、仕事場である「店の間」、生活の場である「台所(だいどころ)」、お客様をお迎えする「座敷」を表の通りから奥庭まで通じる「通り庭」でつながっているものです。この間取りは建物の規模によって多少の違いはあるものの、ほぼ共通しています。下図は、「表屋造」といって、店の間のある表屋と奥の母屋の屋根が別々にかかっている比較的大きな京町家です。

座敷

奥庭に面した座敷は、主人が大切な客人の応接に使う場所です。床の間には季節にあわせたしつらえをしてお客様を迎えます。

奥庭

間口が狭い京町家にとって、自然と接することができ、採光と通風、火災時の延焼防止にも役立つ貴重な空間です。

中庭

表屋と母屋との間の小さな庭です。いつも自然を感じさせてくれるとともに通風・採光に役立ちます。

通り庭

表から裏へと続く細長い土間の総称です。中戸で仕切られ、表は「店(見世)庭」、奥は「走り庭」と呼ばれます。

火袋

走り庭の上部は、炊事の時の煙や火の粉を処理するために吹き抜けています。梁などの木組が美しく、採光用の天窓や高窓が設けられています。

台所(だいどころ)

食事室兼居間として使われる生活の場です。「だいどころ」と呼ばれます。

玄関

店の間の奥には大切なお客様をお迎えする玄関があります。格式の高い空間です。

店(見世)の間

京町家の多くは住まいと仕事場が一体で、表に面した店の間を商いやものづくりのための仕事場としています。

コラム

間取りのバリエーション

京町家の間取りは、部屋の配置によって、一列三室型、一列四室型、二列四室型、二列六室型などに分類することができます。いずれも奥には庭があり、庭の奥に離れや蔵が建っている場合もあります。また西陣では、家の奥を吹き抜けのある土間にして、織機を置く仕事場とした織屋建の京町家が建ち並んでいます。



織屋建の断面図

京町家内部のデザイン

京町家の内部は、通り庭と火袋のような特徴的な空間があるほか、奥へとつながる各部屋を襖で間仕切り、その部屋の役割にふさわしいしつらえにされています。祭事などのハレの日は、襖を取り払って大空間を生み出すことができます。また、座敷と奥庭との間には濡縁ぬれえんなど半屋外の空間を設け、その内側に季節に合わせて障子などの建具を入れます。



とおにわひぶくろ
通り庭と火袋

表通りから奥庭まで通じる通り庭と上部の火袋。吹き抜け上部に梁や貫を組み合わせた造形は美しく、職人の技を競い合う場でもありました。



ハレの日のしつらえ

ハレの日には、襖を取り払った大きな空間で、大切なお客様をもてなします。

とこま
床の間

座敷にはハレの空間にふさわしい床の間が設けられています。掛け物、置物や花などを飾り大切なお客様を迎えます。



しょうじ
障子

座敷と奥庭との境には濡縁ぬれえんなどがあり、その内側の障子は、軽やかに内と外をつなぎ、陰影のある豊かな内部空間を生みだします。



らんま
欄間

鴨居かまいと天井との間の欄間には、小障子、組子、彫り物、透かし彫りなどの装飾が施されています。



ふすま
襖

各部屋を間仕切る襖には、紙、引手、縁の意匠によって、部屋の役割に合わせてさまざまなデザインがなされています。

「畳割り」の寸法ルール

京町家は、畳の寸法を基準として部屋の大きさ、柱の位置を決める「畳割り」うちわり（内法制の寸法ルール）による合理的な平面計画が大きな特徴となっています。



自然とともに くらす

第1章
《たてもの編》

4

京町家では、^{れんたん}連担(つながり)のルールによって小さな庭が隣家とつながり、まちなかにも関わらず、自然と触れ合う空間が驚くほどに確保されています。建物も、木を始めとする自然の素材で作られており、時を経るほどに味わいを増します。



自然との共生

気候や自然の^{きび}厳しさとも向き合いながら、四季折々の植生の変化や一日の光の変化、雨や風の音、生き物の気配などを感じることができます。また、庭と表の通りとの温度差によって人工的な風の流れを住まいに取り込む工夫もなされています。



座敷からの視線を基準にして植栽、燈籠、蹲などが効果的に配置されています。日本庭園の要素、技術が取り込まれています。



小さな庭ですが、通風・採光を確保するとともに、凛とした雰囲気を漂わせています。



暑い夏には、日射しを^{さよぎ}遮り、風を呼び込む工夫をしながら、暑さと向き合い、暑さを凌ぐくらしがあります。



寒い冬には、建具や床の敷物などで寒さを^{しの}凌ぐ工夫をして、時には静かな雪景色を楽しむこともしながら、春の訪れを待ちます。

第1章 《たてもの編》 ・ 自然とともにくらす

京町家の素材

京町家で使用されている材料には、現代の住宅では少なくなった木、紙、土、石といった自然素材が使われています。柱などの木、障子・襖の紙、土壁の土、畳など、いずれもその質感のやさしさを五感で感じることができます。

木

柱には松・杉・松、梁には松、鴨居には杉、敷居には松・桜・松というように、さまざまな木がその特性を活かしつつ使い分けられています。



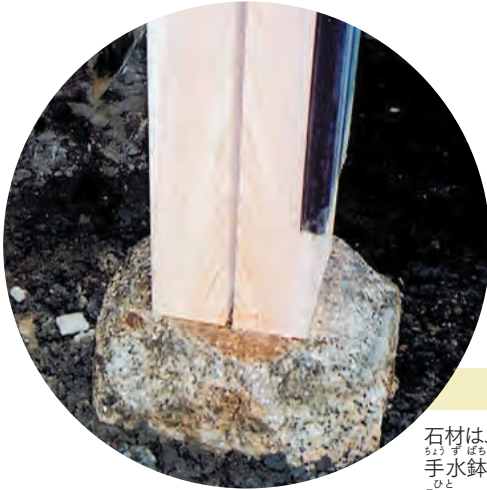
土

土は、瓦や土壁の材料になるほか、瓦屋根の下地としても利用されています。古い土は、再利用が可能です。土壁の仕上げには自然素材の漆喰も使われます。



石

石材は、庭の沓脱石、飛び石、手水鉢、蹲や、柱を支える「一つ石」、通り庭の敷石などに利用されています。



紙

紙は、障子や襖、屏風などに使われています。京都には古くより全国から多様な種類の紙が集まってきました。



竹

加工しやすい真竹や女竹が使われることが多く、土壁の下地（木舞）や床の間などの室内の造作、犬矢来などにも使われています。



塗料(ベンガラ)

ベンガラの主成分は鉄分で、防虫効果があると言われており、格子や柱、梁、天井、外壁の木部などに使われています。墨などを混ぜて落ちついた色合いに仕上げます。



コラム 使い続けることができる「素材」と「サイズ」

京町家は、自然素材でできています。また、畳や建具などは決まったサイズで作られています。そのため、再利用や入替えが容易にできます。

人や環境にやさしいだけでなく、都市に住まう人々のために大量に生産することを見据えた合理的なシステムとなっています。

京町家を作る昔ながらの知恵は、新たな環境共生の社会的なシステムを作りだす可能性を持っています。



京町家を ささえる職人技

第1章
《たてもの編》

5

京町家は伝統軸組構法で作られ、
多くの職方さんの技に支えられています。



伝統構法と在来構法

京町家は、伝統軸組構法で建てられています。柱と梁の貫、土壁などの全体の粘りで、地震や台風などの外からの力を吸収します。

現在、一般的に建てられている在来構法の建物は、筋かいや構造用合板の壁によって、地震や台風などの外からの力に抵抗して建物の変形を防ぐ考え方に基づいています。

※昭和25年（1950）の建築基準法の制定によって、新たに伝統構法の建物を建築することは非常に困難になりました。

伝統構法

柱

建物を支えるための垂直方向の主要な部材です。建物の中心近くには大黒柱、小黒柱（恵比寿柱）と呼ばれる柱があります。

礎石

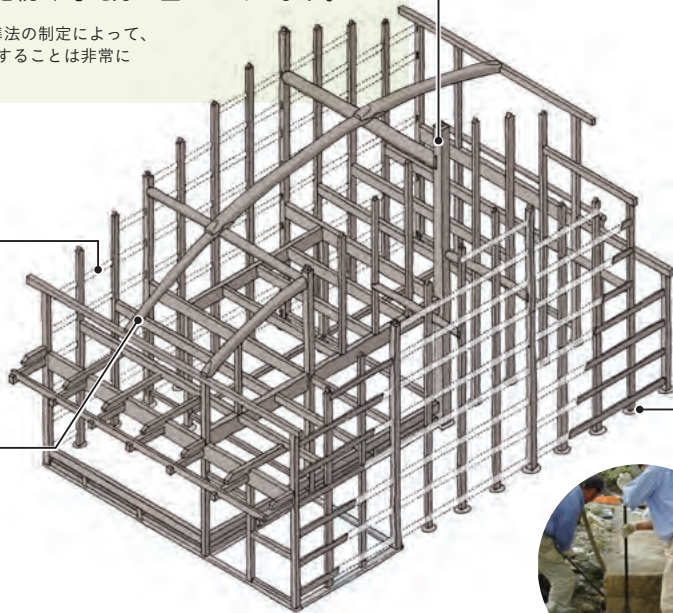
柱の下に据える礎石のことで、柱ごとにひとつずつ据えられます。

貫

壁下地材の取り付けと架構の補強を目的として、柱などの垂直材間を貫通して通す水平材のことです。

梁

建物を支えるための水平方向の主要な部材で、場所によって、人見梁、登り梁、地棟梁、側繋ぎ梁などと呼ばれます。



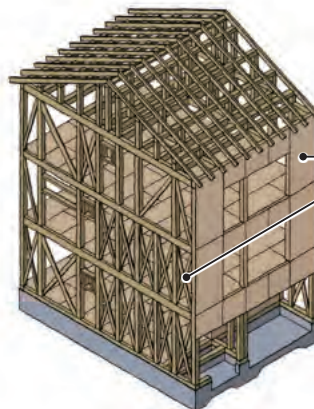
在来構法

構造用合板

合板のうち構造耐力上の強度を持たせた合板のことで、筋かいと同様に、地震や風圧に抵抗するために使われます。

筋かい

柱と土台・梁に囲まれた四角形の枠組みに斜めに取り付ける補強部材のこと。地震や風圧に抵抗するために設けられます。



| | 伝統構法 | 在来構法 |
|-------------------------|---|--|
| 基礎 | 自然石（一つ石）の上に柱を載せます。柱と石とは緊結されません。 | 基礎コンクリートの上に土台を載せます。両者は金物で緊結されます。 |
| 壁 | 竹木舞の下地の上に土壁による仕上げを行い柱を表に出す真壁造りが一般的です。 | 和室以外は柱を出さない大壁造りが一般的です。補強用に筋かいや構造用合板が使われます。 |
| つぎて・しぐち継手・仕口（部材を接合する方法） | ほぞ（部材接合のために部材の木口を作る突起）とほぞ穴による接合を基本とします。 | 接合部は、金物による補強を基本とします。 |

京町家を守る職方さん

建築などで専門の技術を持った職人さんのことを尊敬と親しみを込めて「職方さん」と呼びます。大工を始め瓦、左官、建具などそれぞれの仕事についての専門家です。京町家の維持管理や改修をする時、頼りになるのが職方さんたちです。



大工

施工図作成、木取り、墨付け、加工、建方、造作取付けなどの木工事のすべてを行います。また、他の仕事全てを総括する役割も担っています。



建具職

建具の製作や取付けを行います。サッシなどの金属建具では枠取付けのほかガラス工事を含むことがあります。



瓦職

瓦葺き屋根の瓦を葺く工事を行います。現在では、瓦に突起をつけて桝木に引っ掛ける、引っ掛け桝瓦葺きが一般的になっています。



壁塗りワークショップの様子



表具職

障子、襖などに紙や布を貼るほか、屏風や衝立などの建具全体を作ります。木工技術と表装技術とを兼ね備えています。



左官

壁、床、土塀などにさまざまな鏝や板を使って壁土や漆喰などを塗り、仕上げをします。

コラム 職方さんはほかにもたくさん

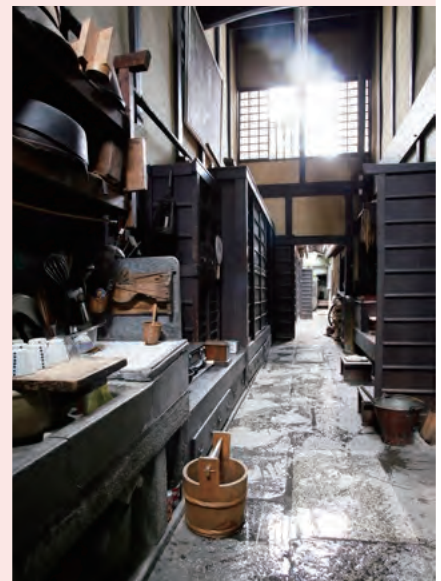
このほか、板金、石、畳、塗装、洗い、植木、水道、ガス、電気など、たくさんの専門の職方さんが京町家を支えています。



ワークショップで子どもたちが壁塗りを体験。



京町家 の いろは



第2章 《くらし編》



京町家の 365日

第2章
《暮らし編》

1

京町家では、季節ごとのさまざまなしきたりが
暮らしの中に息づいています。それらのしきたりには、
暮らしをより楽しく、快適にする昔ながらの
工夫がつまっています。



受け継がれる季節のしきたり

おくどさん（かまど）にも正月飾りをし、鏡餅をお供えします。



しょうがつ お正月

新しい年を迎えるお正月。しつらえもあらためられ、新春の清々しい空気が流れます。一年の福徳をつかさどる神さまを迎えるために準備します。



京都ならではの「根引きの松」を門口の両脇に取り付けます。



お正月のしつらえがされた座敷。家族全員で新年のあいさつを交わし、お祝膳をいただきます。



歳徳神をまつる恵方棚。天井から吊り下げられており、その年の恵方に向けます。

ななくさがゆ 七草粥

1月7日の朝に食べます。細かく切った春の七草（セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ）を入れ、塩味をつけます。お正月のごちそうで疲れた胃腸をいたわるやさしい味です。



冬

せつぶん 節分

2月3日は節分。季節の変わり目にあたります。神棚にお供えした煎ったお豆をまいて邪気を払います。

うちでは、数え年の数の豆をお供えて、一粒ずつ食べたなあ

節分には「お化け」という、仮装をして鬼の目をだます風習もあるんえ。節分にはいろんなことをして悪いものを追い払うんやね



柗鯛。先の尖ったヒイラギと、においの強いイワシの頭を飾って魔除けにします。



座敷を彩る道具類。「貝合わせ」は、昔は高貴な方の婚礼道具の1つでした。



桃の節句に食べられる、引千切というお菓子。

桃の節句

女の子の健やかな成長を願う日です。春を迎えたお座敷に、ひな人形や桃の花を華やかに飾ります。京都では、ひな人形は向かって左手にお雛様、右手にお内裏様を飾ります。



お軸に兜が描かれ、粽と柏餅が供えられています。

端午の節句

男の子の健やかな成長を願う日です。初夏のお座敷に、鎧や兜、大将さん人形を凛々しく飾ります。鎧や兜には「身を守る」という意味もあり、邪気を払う薬玉などを飾ることもあります。

春



軒菖蒲の様子。菖蒲とよもぎを軒先にさし、穢れを払います。

コラム 五節句って何？

「節」とは、季節の変わり目・節目のこと。奇数が重なる日に、旬の植物の強い生命力によって邪気を払い、健康などを願ったことから、伝統的な年中行事を行う日となりました。3月3日、5月5日、7月7日、9月9日および1月7日をあわせて「五節句」と呼びます。



たてぐが
建具替え(夏)

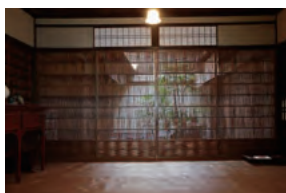
模様替えともいいます。暑さ寒さをしのぐために、障子やふすまといった建具や、敷物を季節に合ったものに替えます。夏には強い日差しを遮りつつ涼しい風が入る葦戸に変え、ひんやりした手ざわりの敷物(網代や籐漙)などを敷き詰めます。



夏
葦戸越しに中庭を見た様子。葦戸を透かして入る光が涼しげです。



建具替えの様子。建具を冬建具から夏建具に一齐に取り替えます。



夏座敷の様子。網代を敷き詰めて見た目も手触りも涼やかなしつらえになります。



中庭を通して建物の中に風を導きます。

コラム ご先祖さまを迎えるお盆

お盆の過ごし方は地方によってさまざまですが、京都では六道珍皇寺や千本えんま堂で迎え鐘をついておしょうらい(精霊)さんをお迎えし、五山の送り火とともにお送りします。お盆が終わると地藏盆がやってきます。地藏盆が終わると間もなく9月を迎え、秋がすぐそこまでやってきます。

秋

ちようよう せつく
重陽の節句

五節句の一つで、9月9日にあたります。旧暦の9月9日は菊の花が咲くころにあたることから「菊の節句」とも呼ばれます。前夜から菊の花の上にのせて露を含ませた真綿で身体をぬぐい、穢れや邪気を払う風習があります。



菊の花の上に真綿をのせた「着せ綿」の様子。

あんこを巻いたお月見団子、大好き！お月見が楽しみやわ

秋は空気が澄んで月がきれいに見えるんよ。京都には、楕円のお餅にこしあんを巻いた、独特のお月見団子もあるんえ

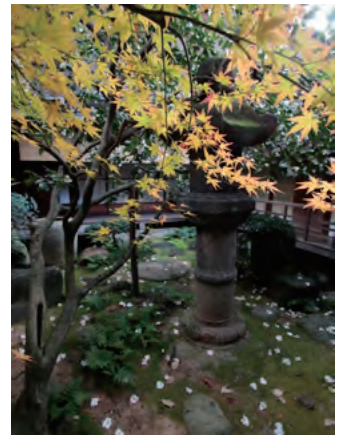




障子が入り、段通が敷き詰められた冬座敷。華やかな段通の柄が座敷の格式を高めます。

たてぐが 建具替え(冬)

秋の建具替えは、障子や襖を入れ、床には「鍋島」などの段通(敷物のこと)を敷いて、見た目や手触りを暖かくします。障子は冬の柔らかな日差しをやさしく室内に届けます。

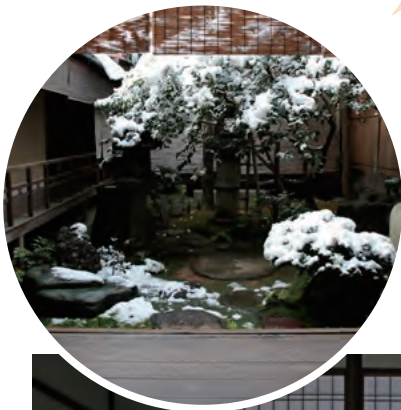


秋の深まりとともにもみじは赤く染まり、庭を華やかに彩ります。

秋



椿の一種、白侘助。寒い季節の小さな花が座敷庭を飾ります。



冬座敷から見える雪化粧の座敷庭。

しょうがつじゅんび 正月準備

お正月に備えてお餅をつきます。蒸しあがったもち米を走り庭でつき、台所(だいどころ)などで丸めます。お餅はお雑煮にするほか、神棚などにお供える鏡餅やほしつき餅(「ほしつきさん」ともいう、丸餅の上にごく小さなお餅をのせたもの)になります。

冬



お餅つきの様子。おくどさんからもち米を蒸す湯気が立ちのぼっています。



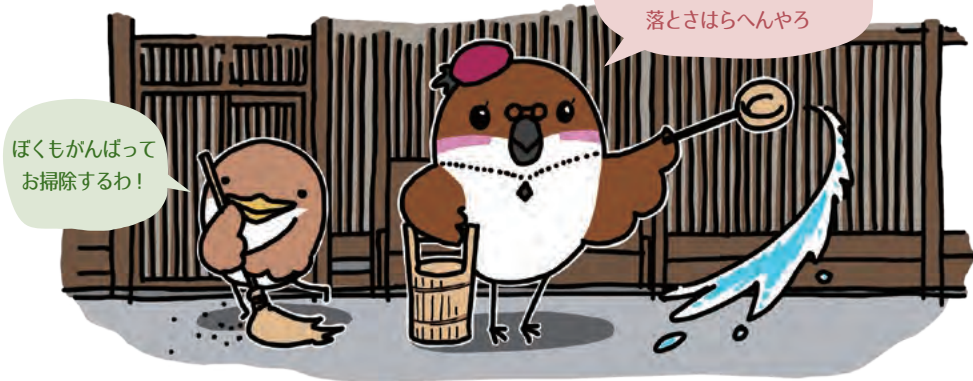


くらしの知恵

第2章 《くらし編》

2

かどは 門掃き・水打ち



ほくもがんばって
お掃除するわ!

いつもきれいにしといたら、
通らはる人もごみを
落とさばらへんやろ

かど(家の前のこと)を掃いてきれいにすることを門掃きといいます。お隣やお向かいに気を使わせないよう、門掃きの範囲は、自分の家の間口と道の真ん中をほんの少し越えたところまで。最後は門に水を打ちます。

季節のお菓子

涼しげな
お菓子を食べて、
夏バテ知らずやな!



6月30日は夏越の祓
(なごしのはらえ)。
無病息災を願って水無月
(みなづき)をいただきます

京都には、季節ごとの和菓子があります。それぞれに健康や幸福を祈る意味が込められ、生活にいろどりを添えるしきたりとなっています。また、お菓子で季節の移ろいを感じることができます。

おもてなしの準備

季節にあわせた
しつらえを工夫するのが
楽しいのえ

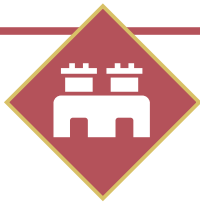
ちりひとつ
落ちてへんように
お掃除!



お客様をお迎えする時は、部屋をきれいにし、季節の花やお軸(掛け軸)で玄関の間や床の間をしつらえるなどの準備をして、「ようこそいらしてくださいました」の気持ちを表します。

コラム ハレとケって?

「ハレ」は、お祭りなどの特別な日のこと。「ケ」は、ふだんの生活のこと。京都では、ふだんは^{けんやく}節約して質素にくらし、祇園祭などでは特別なものを用意する、といったくらしの中でのメリハリを意識する文化があります。



第2章
《くらし編》

毎日に あんしん あんぜん 安心と安全を



南天は、「難が転じる」に通じることから家の鬼門に植えられる植物です



3

木でできている京町家に火は大敵。そのため、京都のまちとくらしには、安心と安全のための工夫がたくさんあります。また、日々のくらしの中で火の用心を心がけることが習慣づいています。

安心と安全のための工夫

京町家の炊事場「はしり」の上には、「火袋」という吹抜けがあります。万が一かまどから火が出て、他の部屋に燃え移らないためのものです。大切なものを納める土蔵が、分厚い土壁しつくいと漆喰しつくいで塗り込められているのも、中のもを燃やさないためです。京町家の庭は隣の庭とほぼ同じ位置にあり、上から見ると「緑の防火帯」がお町内を貫いているのがわかります。こういった火事を出さない工夫と同時に、日々の「火の用心」の心がけも大切にしています。



第2章 《くらし編》

毎日に安心と安全を



ほてい 布袋さん

無事に1年を過ごすごとに、小さな布袋さんから1つずつ、7年かけてそろえます。おくどさんの上にある荒神棚に、入口の方に向けて並べます。

旧有濟小学校たいこぼろろう「太鼓望楼」。太鼓で時を告げ、火災時には半鐘を鳴らしました。



あたご 愛宕さんのお札

「火過要慎」と書かれた、防火・火伏のお札をおくどさんの近くに貼ります。お札は、嵯峨野の愛宕山頂にある愛宕神社で授かります。「阿多古」は愛宕の旧称です。

お仏壇と神棚

京都の古い家は、住まう人の安全と安心の心がけと同時に、仏さまやさまざまな神さまにも守られています。京町家の中にも大切に仏さまと神さまをまつり、毎日お世話をし、手を合わせることで、守っていただいていることへの感謝の気持ちをお忘れなくしています。



しゅうき 鍾馗さん

中国に由来のある守り神。お向かいの鬼瓦から跳ね返った、悪いものから家を守るものとして出入口の上に掲げられます。

京町家とくらしを守ってくれる神さんを大切にすることで、大事な心がけが自然と身につくやで



いろんな神さんに感謝もってくらししています



地域のつながりを大切に

第2章
《暮らし編》

4

たくさんの京町家が連なることによって京都の美しいまちができています。たくさんの住民がお互いに協力し合うことで、安全や快適な生活が守られます。



失われた“絆”^{きずな}が生きる町

京町家は地域やお町内の中にあります。ふだんは「よそはよそ、うちのうち」ですが、互いに尊重^{そんちょう}し合いながら、いざというときに助け合う関係は、お地藏さんのお世話やお祭りなどの昔ながらの行事を通して強くなり、地域の絆^{きずな}となっていきます。



じぞうぼん
地藏盆

お町内のこどもの健やかな成長を願って、8月の終わりに行います。お地藏さんをきれいに飾り付け、お菓子などをお供えし、数珠回しや畚下ろしなど、こどものための催しを行います。



にかいぼやし
二階囃子

「二階囃子」は、祇園祭のお囃子のお稽古のこと。祇園祭にむけて、地域の人々が寄り集まって練習します。



のきした くわかん
軒下の空間

京町家の通り庇（軒）^{のきした}の下の空間は、おうちの中と外をつなぐ空間です。往来する人は、軒下で雨宿りをすることもできれば、祇園祭の際には座敷の飾りつけを眺めることもできます。



じぞう しょうか
お地藏さんと消火バケツ

お地藏さんは地域の住民が大切にお世話しています。お地藏さんのそばに消火器や防火バケツがあれば、防災の心がけを忘れることはありません。

コラム 古い都市の町割(町の単位)

「町」の単位は、現在では通りに「囲まれた」空間となっていることが多いのですが、京都のような古いまちでは、通りを「挟んだ」^{りょうがわらう}両側の家々が「町」の単位になります。これを「両側町」と呼びます。両側町には都市ごとにさまざまな形成のプロセスがありますが、通りを介した人々の交流を大切に



提供 国土地理院

第2章 《暮らし編》

● 地域のつながりを大切に



京町家を 生かしたくらし

第2章
《くらし編》

5

京町家は、建てられてから100年以上が経過しているものも少なくありません。また、昔の生活文化にあわせてつくられているので、新しい住宅とは異なる面もたくさんあります。そういった古い京町家の良さを生かしつつ、楽しみながら、現代の生活にあったくらしをされている方々にお話を伺いました。

谷村 邸

(京都市上京区 西陣)

結婚を機に、西陣にある織屋建ての京町家に移り住まれた谷村さんご夫妻。奥様はつづれ織作家として、京町家で創作活動をなさっています。伝統的な仕事と現代のくらしを職住一致で営むお二人に、京町家の改修や日々のくらしのことについてお聞きしました。



つづれ織の織機のあるミセノマ

第2章 《くらし編》

● 京町家を生かしたくらし

◆ 京町家に移り住んだきっかけ

以前から古いものが好きでした。結婚を機に住まいを探したときに、織屋建の京町家に出会いました。つづれ織作家にとって織屋建の京町家は魅力的でしたし、西陣地区には織物に関わる職人さんがたくさんいらっしゃるの、仕事をしていく上で便利でした。

◆ 地域コミュニティとの関係

地域には自然に溶け込むことができました。地域コミュニティ活動は、地藏盆、運動会、千度参りといった大切な行事以外は大きな負担はないので、大変だと思ったことはありません。

ご近所の方は、この建物がなくなってしまうことを心配されていたので、私たちが移り住むことで京町家が住まいとして生かされるなら安心、と言われました。西陣という土地柄もあってか、ものづくりの仕事ですんなりと受け入れてもらえました。



吹抜けの土間より奥を見る。土間にはかつては織機が置かれていました



土間部分に新たにしつらえられた和室

◆ 京町家を住まいにすること

京町家の改修は、大工さんをお願いする一方、自分たちでもできることはやりました。また、土壁や柱を覆っていたベニヤなどは取り払い、建物が建った当時の状態に戻すよう心がけました。伝統的なものを残しながら地震に強くする工夫も取り入れ、いろいろな工夫で現代でも住みやすい空間にすることができました。

建物が古いので、冬の寒さなど困ったこともあります。しかし、古いものを再生していくこと、土間を活用して和室をしつらえたこと、京町家が持つ独特の雰囲気など、京町家ならではの楽しみや魅力があります。自分たちの生活に合わせて空間を作っていくことが楽しいと感じます。



(左) 外観 (右) 座敷から眺めた庭

武田 邸

(京都市下京区)

代々お住まいになっていた住居専用の京町家の一部を、大正時代から商店街で営んでいた老舗写真館としてスタジオに改装し、職住一致のくらしとなった武田家。新たな役割を担う京町家でのくらしと仕事についてお聞きしました。



写真館を訪れるお客様にも開放している座敷



撮影スタジオ。写真右端に古い建具が見えます

◆京町家での新たなくらし方

老朽化やシロアリ被害に加え、耐震性の不安が改修のきっかけとなりました。京町家に写真館を移転してからは、職住一致となったので、職場への移動がなくなり便利になったと思います。京町家が店舗・スタジオとなったことへのお客様からの評判も良く、座敷や庭を利用した撮影や着付けもできるようになりました。

改修中は一時期マンションに住んでいました。便利で冬も暖かく過ごしましたが、京町家に比べると風情がない、味気ない、息苦しいと感じました。京町家には、風の通り道があり、障子越しの光を感じることができ、木や紙などの天然の素材にあふれています。それらの良さを感じながら仕事をし、日々のくらしを営んでいます。

◆京町家を維持するために

京町家にとって、水は大敵です。建物に水が浸みていないか、シロアリが発生していないかなど、日々の目配りは欠かさないようにしています。

改修にあたっては、基礎など見えない部分を健全化することを特に重視しました。建物をお任せする大工さんなどの職人さんは、信頼できる方でないといけませんし、人と人の相性が重要だと思いました。

◆古いコミュニティとのお付き合い

周辺は居住している人が少ないため、町内会の役がすぐにまわってきます。大変な面もありますが、これからもご近所との古いお付き合いは大切にしていきたいと思っています。

三上 邸 (京都市上京区)

ご主人の実家である京町家にお住まいを移された三上家。はじめて住む京町家でのくらしの様子をお聞きました。



三上邸外観

◆京町家に移住したきっかけ

実家である京町家が、母が亡くなったことで住まい手がなくなってしまいました。すでに雨漏りがしていたので、人が住まないうちにますます建物の傷みが進むのではと心配になり、改修と移住を決めました。主人以外は、家族の誰も京町家に住んだ経験はなく、月に2〜3回訪ねるだけで、建物のことも全く知らなかったのですが、京町家独特の風情があり、家族の歴史が感じられるので、良い印象を持っていました。

◆京町家を取り巻くコミュニティ

建物が京町家として残ることや、昔から住んでいた家族が住むことになったことを、ご近所のみなさんは喜んでくださっています。京町家に移り住んでからはじめて地蔵盆という地域の一大イベントを体験しました。行事や日々のくらしを通じて、町内のみなさんと顔を合わせる機会を持つことができます。

◆京町家でのくらし

京町家のくらしは、特に冬の寒さが厳しいです。床暖房があっても隙間風はあり、特に吹き抜けになっている台所での炊事はつらいです。夏は天窓からの直射日光が射して大変な暑さでした。一方で、お庭の四季や、京町家ならではの風情を感じながらのくらしは大きな喜びです。京町家の風情を残すために、建具や内装など、そのほとんどを昔のまま生かしています。

◆京町家に住み続けるために

お庭の手入れのために、年に2回は庭師さんに入ってもらいます。建物をきちんと維持するために、日々建物の状態に目を凝らし、注意するようにしています。



ハシリニワの吹き抜けの様子



座敷のしつらえ



入口土間



座敷庭





京町家の いろは

資料編



表屋造

おもてやづくり



大きな商家などに見られる
町衆の知恵がつまった京町家





表屋造の特徴の一つである中庭（坪庭）は、奥に長い家に光と風を届け、光と影のうつろいをつくりだします。

表屋造って？

店と奥の住まいが別棟で、玄関棟でつながっています

表に面する店と奥の住居用の建物が別棟で、玄関棟でつながる、比較的大きな商家で見られる様式です。一本の土間が建物全体を縦に貫き、表から店、玄関、台所（だいどころ）、座敷の四室が連なります。店舗棟を表屋と呼ぶことから「表屋造」と呼ばれます。

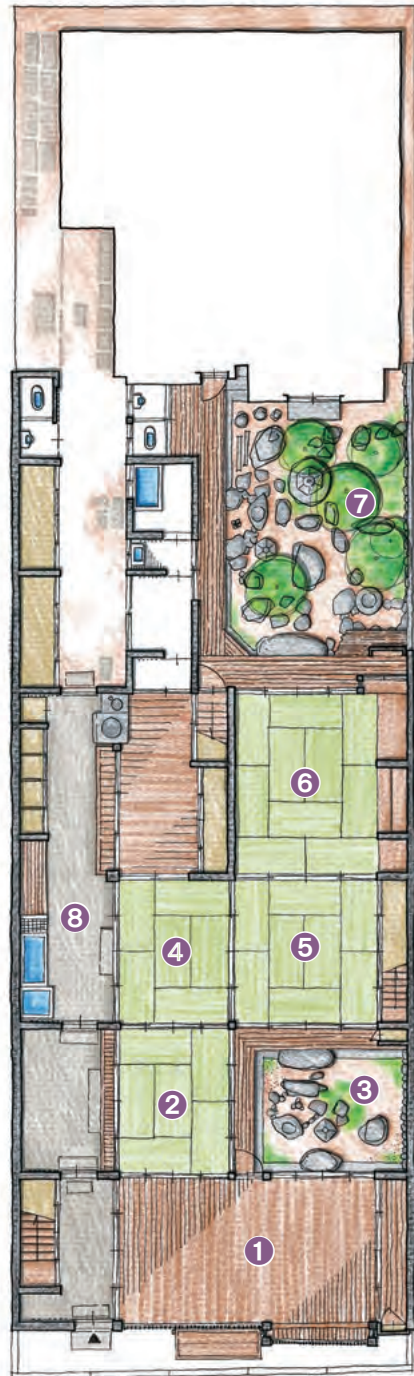
表屋造の特徴

複数の入口があり、用途によって使い分けられます

取引先は大戸を開けてそのまま店へ、家の主人と大切なお客様は正式な玄関から座敷へ通します。ご近所さんや御用聞きなどは、走り庭の「嫁かくし」と呼ばれる衝立から内へ声をかけます。このルールにそって各室の内部の造作や調度も作り分けられています。



中ノ間から奥ノ庭を見たところ。薄暗い室内が襖の紋様や奥ノ庭にあたる陽の光を際立たせています。



1階 間取り

- ① 店
- ② 玄関
- ③ 中庭
- ④ 台所（だいどころ）
- ⑤ 中ノ間
- ⑥ 奥ノ間
- ⑦ 奥ノ庭
- ⑧ はしりもと（走り庭）

一般的に、奥庭の奥には蔵や離れが建てられることもあります。※室名の表記は、京都生活工芸館 無名舎の資料にもとづきます



表屋造のデザイン

格調高い雰囲気が漂います

表屋造の建物には、随所ずいしょにお客様をもてなす工夫がなされています。それに加えて、主の心あるじを込めた手入れや、しつらえがなされることで、四季折々の節目を意識し、日々の折り目正しいくらしが息づいています。



なかにわ
中庭

玄関の格式を高め、また、周りの部屋に光と風を届けます。



みずや
水屋

茶席のための水屋（道具を置き、水を扱う場所）が建具の後ろにあります。



げんかん
玄関

玄関庭に設けられた待合まちあいが、お客様をお迎えるための格式かくしきと情緒じょうじよを演出します。



はしりもと(走り庭)

いしだまの床、高い天井、時を重ねた調度品などに囲まれた独特の空気が漂います。右手前に見える衝立ついでが「嫁かくし」です。



みせ
店

商いやものづくりのために使われていた空間です。中庭からは自然の光や風が届きます。



おくの にわ
奥ノ庭

奥ノ庭からは、季節の移り変わりや一日の光の変化、雨風の気配など数々の自然の恵みを感じることができます。



おくの ま
奥ノ間

本来、奥ノ間は、その家の主人以外が立ち入ることのできない特別な部屋でした。

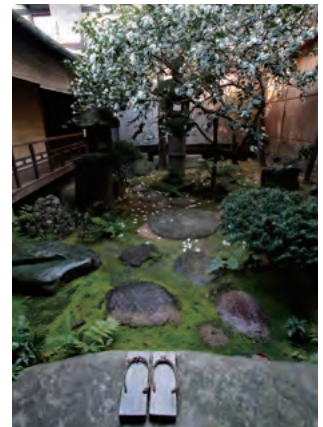
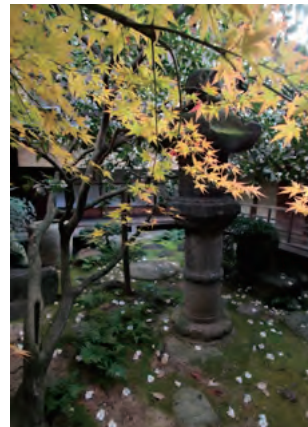




自然とともにくらす

いつも自然とともにある暮らし。
「市中の山居」^{しちゆうさんきょ}とも呼ばれました

表と奥、部屋と庭の間を建具や御簾^{みす}などを幾重^{いくえ}にも重ねて、陰影^{いんえい}やあいまいな空間を生みだしています。小さな季節の変化にも大きな喜びを感じ取ることができる、そうした豊かな感性^{みか}が磨かれていきます。



座敷から庭を眺めると、自然の移り変わりや陰影が生みだす奥行きを感じ取ることができます。秋の彩り、雪景色の静けさなどの季節の変化や、陽の光、月明かり、雨風の気配、庭にやってくる鳥や小さな虫たちなど、楽しみは尽きません。

事例：京都生活工芸館 無名舎^{こうげいかん むめいしゃ}（京都市中京区）



京町家で くらすということ

京都生活工芸館 無名舎

吉田家住宅

きび 厳しい自然環境と上手に同調してきた京町家のくらしぶりには、素晴らしい先人の知恵が随所に見られ、私たちが学ぶべきことがたくさんあります。京都の商家に生まれ、その生活文化を伝え続けてこられた京都生活工芸館無名舎主の吉田孝次郎さんにお話を伺いました。



くにしていとうろくゆうけいぶん かざい
国指定登録有形文化財
きょうと ししていけいかんじょうようけんどうぶつ
京都市指定景観重要建造物



京都生活工芸館 無名舎主
よしだ こうじろう
吉田孝次郎

きたかんのんやま 北観音山町に生まれ11歳より
はやし 囃子方を務める。武蔵野美術
大学を卒業後、同大学造形学
部に勤務。1972年に京都に戻り、
生家を自らの手で復元改修す
る。祇園祭山鉾連合会顧問。

◆ 商いに適した典型的な京町家 「表屋造」

私がこの家に生まれたころは「白生地問屋」といって着物の友禅模様を染める前の絹素材を扱う、とても大きな商いをしていました。町家というのは仕事と住まいが一緒になった「職住一致」が原則です。道路に面したところが商いのための部屋です。玄関は、家族の中で主だけが出入し、五十日（ごとび）は会計部屋となりました。台所（だいどころ）は母と子どもたちが食事をする場、座敷周りの八畳は母の部屋、奥の十畳は主の部屋、とそれぞれの役割が決まっていました。今は私と家内の二人暮らしで商売をしていませんから昔とは部屋の用途がそれぞれ違いますが、表は人をお迎えするのに適しているのです、ギャラリーのような使い方をしています。



四季折々の趣向で掛け物を取り替えて鑑賞するのが主の楽しみ。



京町家で くらすということ



通りに面し、道行く人の目を楽しませる印象的な表屋造の格子窓。



二十四節気七十二候、季節の移ろいを想像させる床の間のしつらえ。



土間で餅つき。水を少なくしてつきあげたできたてのお餅は絶品。



昔は小学校に作法室がありました。節目の礼儀作法は大切な教養。

◆ 季節の行事を大切に扱い、先人の心を感じる

この家でこども心に印象深かったのは、年神様をお迎える正月のころのことです。厳粛な雰囲気の中、常の親子にはないあいさつの交わり方から一年が始まります。そうやってかつてのご先祖たちのくらしぶりを再体験してきたでしょう。御馳走の出来栄えがどうだというのも、正月の大事な会話のひとつでした。いまのような贅沢なおせち料理ではなく、れんこん、ごんぼ、にんじんといった冬の根菜を四日間火を通さずとも食べられるようにした煮しめが御馳走。大御馳走は棒鱈です。七草粥、小豆粥といった季節ごとの食べ物もいいものですね。私の代になって、最近まで近所の数家族が集まってにぎやかにお餅つきをしていました。これもめでたく、おいしく、楽しい行事ですね。



京町家で くらすということ

桃の節句。京都では旧暦の4月3日にお祝いすることもあります。



端午の節句（菖蒲の節句）。菖蒲には邪気を払う力があると信じられていました。

◆自然環境と同調してくらす 「呼吸する住まい」

この家を訪れる若い人たちは、経験したこともないこの住空間に懐かしさを感じるようです。かつての住空間と日本人の生活感情というものと同調しているのでしょう。夏は暑い、冬は寒い、その条件のなかで住まいの作り方を工夫していました。中庭は光が当たらず、奥庭は直射日光が当たるように庭を陰陽に作り分けることで座敷周りに揺らぎの風が生じ、快適に過ごすことができます。昔はそうして厳しい環境を、むしろ喜ぶようにくらししていました。いまは物があり過ぎて、人々の顔は浪費に疲れているように見えます。たとえば今の季節なら、ふきのとうが芽生えてそれを味噌汁の中にふっと入れて、大切に季節を味わうような感動がくらしのなかにあってほしいものだと思います。



晩秋から初夏にかけて咲く奥庭の白侘助。冬のころは蹲の水面に月が映ります。



6月の半ばになると襖や障子を取り払って建具を替え、夏座敷へとしつらえを替えます。



京町家で くらすということ



屏風祭では調度品を公開し、道行く人と一体になって祭を喜び合います。

◆ 商人の家が育てる 京の文化の真髄

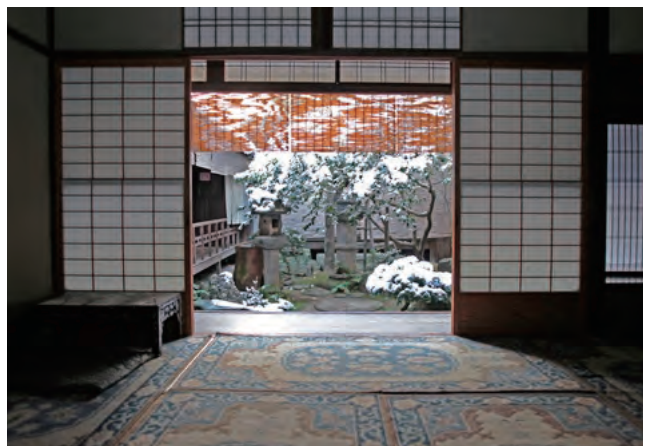


後祭での北観音山。

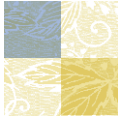
よく母親が「下駄の裏に付いている土まで持ってきてくれる」といって人様の出入りを喜びました。「牛のよだれのようなつきあいを大事にしよう」。いい格好せず長くつきあいが続くように、というのもこの家の合言葉でした。部屋に掛かる「堪忍」の木額に示されるように、石田梅岩先生の「石門心学」がこの家の、京都の商人の生活習慣を律していました。正直、勤勉、質実さ。質素儉約に努め、生活に怠りないように目を配りながら蓄えた少しのお金を、祇園祭の山鉦の美しい装飾品のように、百年二百年と人々が喜び続けられるものに投資する。この町の人々の日常生活感、そして教養が京都の伝統工芸や伝統産業を格調高く育ててきたのだと思います。この家に来て身体で感じていただけたら、言葉がなくても十分にそのことが伝わるのではないのでしょうか。



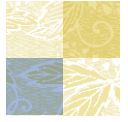
夏のしつらえ。風通しよく見た目にも涼しい簾戸が新緑を引き立てます。



座敷と庭を隔てるのは、下半分がガラス戸になる雪見障子と呼ばれる建具。建具を閉めて部屋の暖かさを保ったまま外の景色を楽しめます。



京町家
の
いろは
資料編



一列三室型

いちれつさんしつがた



基本形の京町家



京都市
CITY OF KYOTO



いちれつさんしつがた

一列三室型って？

3つの部屋が奥に向かって一列に並びます

京町家の間取りは、部屋の配置によって分類されることがあります。一列三室型は、建物を縦に貫く走り庭に沿って、表側から、店、台所（だいどころ）、座敷の3室が連なって配置されています。



店の間（土間）から奥を見たところ。右手に走り庭が続き、目の前には台所（だいどころ）、奥の間を通して奥の前栽（せんざい）の明るさを見通すことができます。

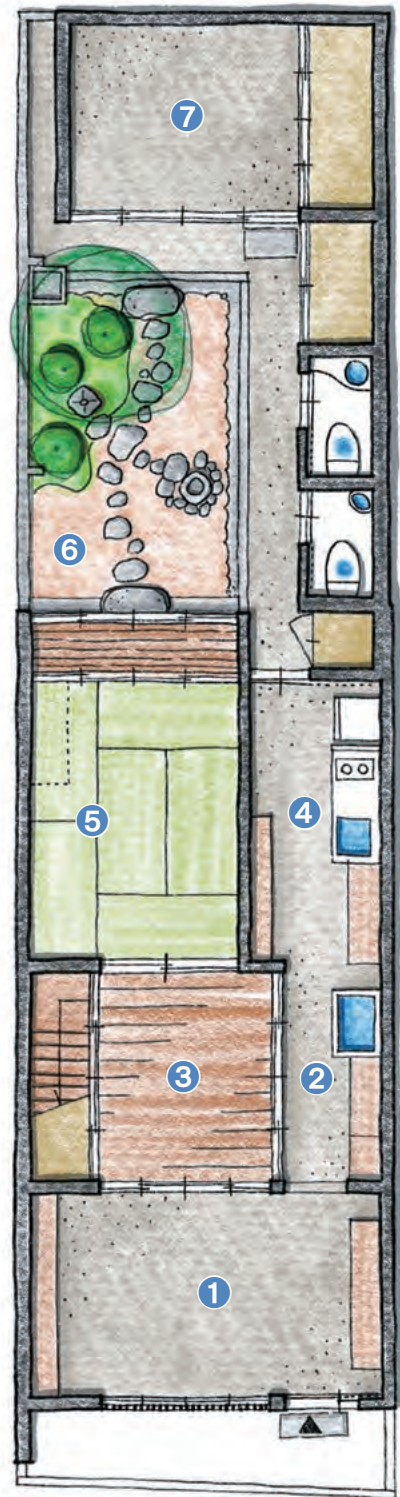
一列三室型の特徴

京町家の基本的な要素が凝縮されています

もともと京町家は、商いやものづくりを行う「職」と、暮らしの場である「住」が共存する建物です。一列三室型は、各室、走り庭、奥庭など、京町家を構成する基本的な要素が含まれており、京町家の基本形を学ぶには、ちょうどよい大きさの建物です。



伝統的な京町家の要素を備えた美しい外観です。



1階 間取り

- ① 店（見世）
- ② 内庭
- ③ 台所
- ④ 走り庭
- ⑤ 奥の間
- ⑥ 前栽
- ⑦ はなれ

※室名は、事例の関係資料にもつきます
※ここで例にあげた京町家にはお風呂がありませんが、町内の催事などに使うことを目的とした建物であるためです



一列三室型のデザイン

随所に京町家らしさを滲ませています

中規模の建物ですが、大屋根、通り庇、虫籠窓、格子などの京町家の基本的な外観要素が揃っています。内部は、通り庭、火袋、格式ある座敷、光や風をもたらす奥庭などが役割ごとに作り込まれています。



ツシと呼ばれる、天井高の低い2階の4畳の部屋です。虫籠窓を内側から見た様子です。



走り庭から入口側を見たところ。一直線の土間、柱・梁・土壁に囲まれた独特の空間です。



前栽（せんざい）と呼ばれる奥の庭。くらしに潤いをもたらす貴重な空間です。

事例：釜座町町家（京都市中京区）

明治時代に釜座町の町内へ寄附された「斧屋」の屋号のあった金物屋さんの建物です。改修によって京町家の美しい姿を取り戻しました。

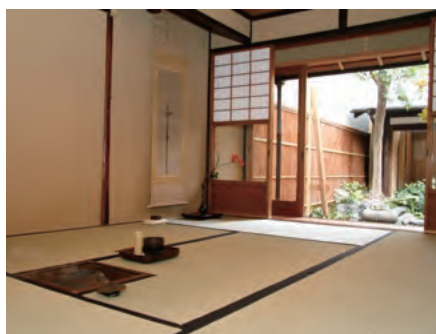


before

after

◆ 釜座町町家で催されたお茶会の日のしつらえ

釜座町町家の修復工事が完成した時に催されたお茶会の日の様子です。特別な日のお客様を迎える支度が整い、清々しい空気が漂っています。

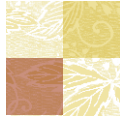


このお茶会は、釜座町町家修復工事完成報告会に併せて、支援者であるワールド・モノメント財団などの関係者を対象に開催されました。釜座町の釜師第16代大西清右衛門氏が席主をつとめ、大西清右衛門美術館所蔵の茶釜、掛軸などでしつらえがなされています。



京町家の いろは

資料編



織屋建

おりやだて



奥に広がる作業場の
大きな空間が魅力の京町家



京都市
CITY OF KYOTO



おりやだて 織屋建て？

はたお
機織りに適した造りの京町家です

織物業が盛んだった西陣に多く見られる京町家の様式です。西陣織の機織りの作業を行うのに適した家のかたちです。一般的な京町家とは表と奥の使い方が異なり、表に住まい、奥に作業場があります。

織屋建の特徴

外からは想像できない

大きな吹き抜け空間が魅力です

家の奥に手機てばたや力織機りきしよつきなどの織機しよつきを並べて作業を行うため、大きな吹き抜けの空間を設け、床は多くは土間となっています。こうした特徴を活かして、カフェやフォトスタジオなどとして活用する事例も増えています。



作業場の大空間に設置された存在感のある力織機。



織屋建の断面図



土間から作業場を見たところ。京町家らしい火袋が作業場の吹き抜けへと続いています。



1階 間取り

- | | |
|------------------|--------------|
| ① 玄関土間 げんかんどま | ② 土間 どま |
| ③ 事務室 じむしつ | ④ 工房 こうぼう |

織機を置くための天井高の高い吹き抜けスペースが奥に設けられます。

※室名は、事例の関係資料にもとづきます



織屋建のデザイン

機織りのための大切な空間です

作業場の吹き抜け空間は、天井近くの梁や、屋根裏が直接見える構造で、光を取り入れるための天窓があります。



火袋を見上げたところ。



西陣織の作業工程は効率的に作られています。一つ一つの作業が重要な作業です。

事例：生駒邸（京都市上京区）

今でも大型の力織機かどうが稼働しています。



居住空間を見たところ。落ち着いた雰囲気の部屋が続きます。



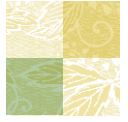
大きな幅の西陣織を織ることのできる力織機です。スイッチが入ると迫力のある音が響き渡ります。



織模様を制御するために、かつては紋紙（もんがみ）とよばれる穴をあけた厚紙が用いられていましたが、現在はコンピュータが用いられています。



京町家
の
いろは
資料編



路地の京町家

ろじのきょうまちや



路地の中にひっそりと佇む京町家



京都市
CITY OF KYOTO



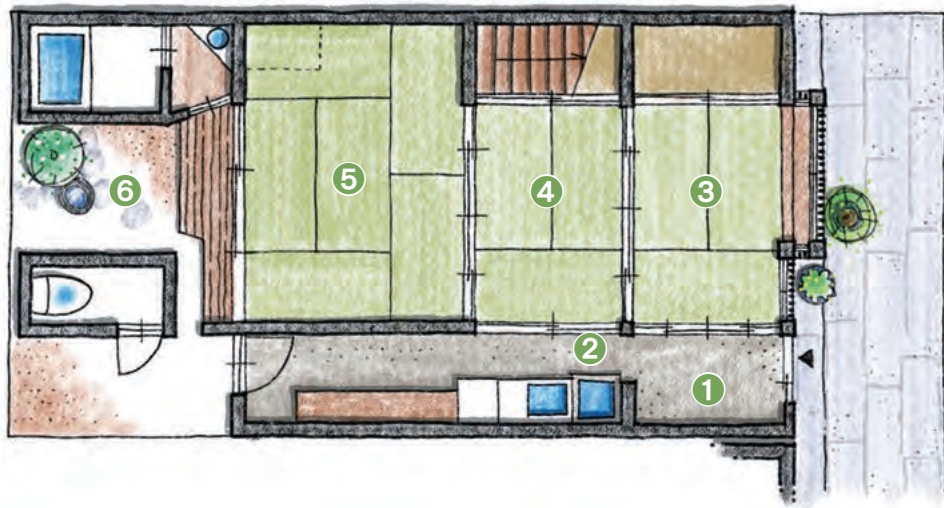
ろ じ きょうまち や 路地の京町家って？

路地の通路に面して
京町家が建ち並んでいます

表通りから一歩足を踏み入れた路地の中では、通路は屋外のくらしの舞台の一部になります。そこは、車の入らない安全なこどもの遊び場にもなります。お互いにお隣を思いやる穏やかなくらしが息づいています。そんな路地の中にも、たくさんの京町家があります。



石畳が続く奥深い路地。
※路地に入る時にはお住まいの皆さんのご迷惑にならないよう
気をつけましょう

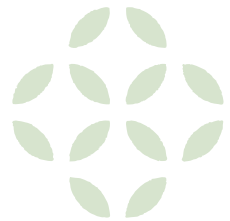


通り庇の軒下が鉢植えの花や緑で彩られ、格子戸に棕櫚竹が良く似合っています。

1階 間取り

- | | |
|----------------------------------|------------------------------------|
| ① 玄関土間 <small>げんかんどま</small> | ② 通り庭 <small>とおいわ</small> |
| ③ 表の間 <small>おもてま</small> | ④ 台所 (中の間) <small>だいどころ</small> |
| ⑤ 座敷 (奥の間) <small>ざしき</small> | ⑥ 庭 <small>にわ</small> |

路地に面した京町家。比較的小規模な
一列三室型ですが、京町家の要素を
しっかりと備えています。
※室名は、事例の関係資料にもとづきます



路地の空間

路地は大切なくらしの場です

通路はそれぞれのお家が掃除・打ち水をされ、誰もが気持ち良く通れるよう、きれいに
されています。



路地の京町家のデザイン

路地の中の京町家

表通りの賑わいから一步中に入ると、通路を挟んで軒を連ねる京町家があります。人々のていねいなくらしぶりがうかがえる居心地の良さをを感じる京町家です。



座敷から庭を見たところ。やわらかな光から春が近づく兆しを感じ取ることができます。



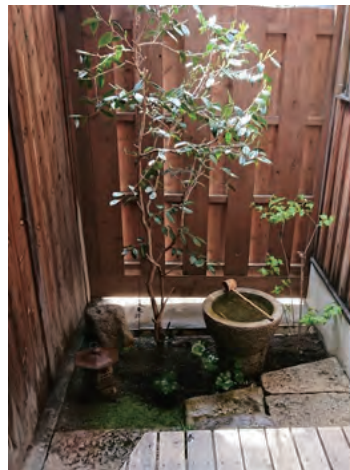
出格子から光が射し込む表の間。ついたての衝立とお花がお客様を迎えてくれます。



3畳の台所（だいどこ）。右の舞良戸（まいらど）を開けると押し入れです。左は2階への階段がのぞいています。



高窓からの光が降り注ぐ火袋。「火遇要慎（ひのようじん）」の御札（おふだ）が京町家を見守ります。



板塀に囲まれた小さな庭に侘助椿（わびすけつばき）や山吹（やまぶき）と手水鉢（てみずばち）。手入れの行き届いた空間です。



急勾配の階段。押し入れの中に隠されていることもあります。

事例：路地町家 有（山田家）（京都市中京区）

この路地のお町内には、祇園祭の鉾が建つため、路地の人々もお祭行事の運営で忙しいそうですが、それぞれの軒先に祭礼提灯が吊るされ風情のある雰囲気になります。

2階の座敷。趣のある調度品をしつらえた、落ち着いた雰囲気のある部屋です。



参考文献

【書籍】

- 「京の町家」 島村昇 鹿島出版会 1971年
- 「まち祇園祭すまい 都市祭礼の現代」 谷直樹、増井正哉編 思文閣出版 1994年
- 「京町家から始まる京都の新世紀 京町家再生プランーくらし・空間・まちー」
京都市都市計画局都市企画部都市づくり推進課 2000年
- 「町家再生の技と知恵 京町家のしくみと改修のてびき」 京町家作事組 学芸出版社 2002年
- 「なるほど！「京町家の改修」～住みつづけるために～」 財団法人 京都市景観・まちづくりセンター 2003年
- 「京町家改修技能者マニュアル 平成19年度版」 京都府建築工業協同組合 2008年
- 「秦家住宅 京町家の暮らし」 秦家住宅編集委員会 新建新聞社 2008年
- 「京町家の再生 Machiya Revival in Kyoto」 財団法人 京都市景観・まちづくりセンター 光村推古書院 2008年
- 「京の町家案内 暮らしの意匠の美」 淡交社 2009年
- 「京 杉本家の四季：町家270年の歴史と暮らし」 奈良屋記念杉本家保存会 ランダムハウス講談社 2009年
- 「京町家の手帖 改修と住まい方の手引き」 財団法人 京都市景観・まちづくりセンター 2011年
- 「Kyoto Machiya Revitalization Project 京町家再生プロジェクト」 京町家再生研究会 2011年
- 「暮らしを受け継ぐ京町家 わたしの家物語」 財団法人 京都市景観・まちづくりセンター 2012年
- 「福ねこ お豆のなるほど京暮らし」 山口珠瑛 京都新聞出版センター 2018年
- 「路地保全・再生デザインガイドブック」 路地保全・再生研究会監修 京都市都市計画局まち再生・創造推進室 2018年
- 「京都市京町家保全・継承推進計画」 京都市都市計画局まち再生・創造推進室 2019年

【雑誌】

- 「異なる価値観の共存」 高田光雄 京都だより No.476 一般社団法人 京都府建築士会 2016年
- 「京町家の保全・継承の論拠と課題」 高田光雄 建築と社会 Vol.100 No.1163 一般社団法人 日本建築協会 2019年

京町家は、古い建物やけど、
いまの生活に役立つ知恵が
たくさん詰まってるんえ。
機会があったら、実際の京町家の
中を見学させてもらって、
すばらしい空間を
体験するのがええわ

よそのおうちにおじゃま
するときは、いつも以上にお
行儀ようできるよう、
気をつけなあかんね



発行

京都市都市計画局 まち再生・創造推進室

監修(敬称略、五十音順)

大場 修
高田 光雄
振本 ありさ
吉田 孝次郎

取材協力(敬称略、掲載順)

谷村 寧昭、森 紗恵子、武田 定師、武田 美紀、
三上 純一、三上 千津佳、長谷川 明(釜座町町内会)、
生駒 勲、山田 有子

写真協力(敬称略)

井上 成哉、大西清右衛門美術館、釜座町町内会、
京都市文化財保護課、京都市歴史資料館、
公益財団法人四條町大船鉦保存会、
ワールド・モニュメント財団、be京都

編集

株式会社らくたび

デザイン

株式会社フルーツドロップス

イラスト

大武 千明

インタビュー(吉田 孝次郎氏)

竹添 友美

制作

公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター

